完訳

バガヴァッド・ギーター

鎧　淳 訳

中公文庫

天保の人びと

（新少年少女教養文庫 15）

かつおきんや著
内田喜三男装幀
さしえ

牧書店発行

かつおきんや
210 天保の人びと
〔新少年少女教養文庫 15〕
牧書店 1969年（昭和44年）
284P 22cm 小学4・5年～中学
内容：権力をふりかざすさむらいたちに対して，力をあわせてたたかいぬいた，江戸時代終わりごろの北陸の農民たちの物語。

検印廃止

■ 天保の人びと
新少年少女教養文庫 15
定価 600 円
1969 年 5 月 7 日 第二版印刷
1969 年 5 月 13 日 第二版発行
著 者 かつおきんや
発行者 東京都新宿区揚場町 1
牧 義 雄
印刷者 東京都豊島区高田 3—12—9
綿野 脩三
発行所 東京都新宿区揚場町 1
株式会社 牧書店
電話（269）2081～4
振替・東京 196483 郵便番号・162
〔乱丁・落丁はおとりかえいたします〕
5681212 編 集 田中庸友・和田治子・原沢征雄

印刷・東洋経済KK
製本・榎本製本所

天保の人びと

もくじ

● 叫びはあがった　2
天保九年、不作だった　16
どうか見立てを！　32
十村は返事を持って来た　47
あやしい二人組　66
奉行があす村へ来る

● 仕組まれた見立て

80 ＝ 豊作ではないか

96 ＝ 苦しめられるおとうたち

118 ＝ 薬をとどけよう

● たたかいは勝ったが……

140 ＝ 犀川の牢に入れられる

159 ＝ 西念おけさは風にのる

179 ＝ 安右衛門の死

199 ＝ 次はおらを入れてくれ

● 五箇山への旅

220 ＝ 雲の上を見よう

236 ＝ だまされた者がもう一人

255 ＝ こわいのは自然じゃない

266 ＝ その後の人びと

271 ＝ あとがき

276 ＝ 著者紹介

装幀 さし絵 内田喜三男

題字 芦田孝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中公文庫

完訳 バガヴァッド・ギーター

鎧　淳訳

中央公論社

目次

まえがき　5
固有名・事項等について　9
完訳 バガヴァッド・ギーター　25
訳註　195
互いに同一あるいは酷似する詩脚　245
解説　253

だ。

しかし、ほんとうは村いちばんのがんこおやじだ。顔はもちろん、しわくちゃ。からだもやせているけど、声の大きいことでは村いちばんだし、まがったこと、すじの通らないことは、大きらい。相手のすること、言うことがなっとくいかなかったら、大声はりあげて、とことんまでつきつめる。村での地位は低いけど、まるであの大久保彦左衛門みたいだということで、みなからじいまとよばれているのだ。

おとうは地面に膝をついているじいまの白いかみを見ながら、いつものおだやかな口調でたずねた。

「じいま。ことしの稲のできは、どのくらいやと思う。」

「へえ。いつもの半作ぐらいでしょうか……。」

「そうよのう。弱ったもんじゃ……。」

ふたりの話がとぎれた。

春、田植えは、まあまあだった。だが、つづく六月から七月にかけては雨の日が多く、気温があがらなくて、稲はさっぱりのびきらなかった。

おらたち子どもは、毎日競争して田んぼを歩きまわっては、イナゴのすを取った。水がいっぱいはってある田んぼの水面は、風にふかれて、ごみやこやしのあわなどが、一方に集まって

まえがき

ここに提出するのは、今日なお、多くの人びとの心に深い感銘を与え、高い精神的意義を持ち続けているインドの古典「バガヴァッド・ギーター」の全訳である。

大学在学当時、辻直四郎「バガヴァッド・ギーター――古代印度宗教詩」（東京・刀江書院、昭和二五年）によって、初めてこの詩章の美しい内容に触れ、「私利私欲を離れ、執着なく、なすべき行為を遂たす」という教えにいたく感動した。そして大学院進学に際し、これが全篇の飜訳を思い立った次第である。大学院での修士論文は、これに則し、ギーターに関するものであり、ヨーロッパで公刊した著述もまた、ギーターの擬似文献を取り扱ったものであった。今日すでに、なん点かのギーター邦訳が刊行されている中で、あえて拙訳を公開する理由はと問われれば、何よりも、学生時代からの志を実現したかったから、と答えるのが順当であろう。と同時に、ここで、とりわけ今日の若い人びとに、「私利私欲を離れ、執着なく、結果の成否を度外視して、なすべき行為を遂たす」という生き方のあることを、改めて強調しておきたかったから、

なわんという者がおります。」

「そうやろうのう。」

「だんなさま。お奉行さまにお願いして、稲のぐあいを見にきてもろうて、年貢をへらしてもらうというわけには、いきませんでしょうか。」

「うむ。考えておこうな、じいま。」

「へえ。よろしゅうお願い申します。」

じいまは、ものたりなさそうだったが、もどって行った。庭先の、じいまがすわっていたそばの赤いまんじゅしゃげの花が、首の所から折れていた。おとうは、じいまが帰って行った後も、縁先でじっとそれを見つめていた。

まったく、ひどい年の連続だった。ここ五年ほどをふり返ってみよう。

天保四年——この年は、田植えのころに日照りがつづき、六月には寒くなって稲が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら、数多くの有効な示唆を受けた。

翻訳に当たっては、ギーターの詩人が、これによって、人びとに何を伝えようとしたか、その趣旨の再現を中心的関心としたことはいうまでもない。訳文の作成に際しては、先に公開した「マハーバーラタ　ナラ王物語――ダマヤンティー姫の数奇な生涯――」（岩波文庫）の場合同様、原文の意味を忠実に写した正確な日本語散文訳の作成に心掛けた。このため、日本語の語法および文脈上、訳語の選択に当たって、徹底した一原語一邦語主義を採用することはできなかった。訳文中、括弧内に入れた語句は、訳者による補足あるいは説明である。また、〃――王よ――〃、〃――クルの王よ――〃、〃――バラタの御子よ――〃等、――によって挟まれる呼び掛けは、この詩章を聴聞しているドリタラーシュトラ王に対する、語り手サンジャヤの呼び掛けである。

訳註は、本訳に興味を抱かれる学者のため、煩を厭わず、これが基礎となった資料、典拠を列挙、記載した。従って、一般の読者はこの部分を割愛されてよい。一般の読者のためには、インドのこの種のテキストに固有な幾つかの語彙、事項等について、簡単な説明を施し、表として添えた。

ギーターを手にしてから、すでに四十余年が経過した。この間、内外のギーター研

究に関心を注ぎつつ、ここに拙訳を作成し了えて、思い半ばを過ぎるものがある。本訳稿の作成中、絶えず訳者を励まし続けられた中公文庫編集部曽我水香子嬢の限りない配慮と協力に、ここで篤く感謝の意を表したい。

平成九年一二月

鎧　淳

固有名・事項等について

アーディトヤ神群――ヴァルナ神、ミトラ神を首班とする上位七天神の一群。リグ・ヴェーダでは、道徳的色彩の濃い讃歌がささげられている。

アートマン――「自己」。人間、生類の体内に存する個々の霊魂、および全一の世界霊、宇宙霊。

アイラーヴァタ――インドラ神の騎乗する神象で、象類の始祖。天地の東の方位を護持するとされている。

アグニ――火(神)。

アスラ――阿修羅。六道で、人間の下位に立つ魔神。

アシタ――太古の聖賢。

アシュヴィン双神――直接の根拠となった自然現象は不明で、強いてこれを求めれば、日の出、日没時に輝く「明けの明星」と「宵の明星」に、多少の可能性を求めうる。危難や困窮からの救出、また、奇蹟的医療を本領とする一組の双神。

アナンタ――また、シェーシァ。ヴィシュヌ神が手中に携える蛇神の名。またヴィシュヌ神の異名。シェーシァはこの蛇神の名。

アハンカーラ――「我執」。自己意識、あるいは、経験上の自我意識を形成する働きをなす、微細な物質からなる内的器官。

アムリタ――天地創出の際、乳海の攪拌により、神々が得た不死の霊液、甘露水。

アルジュナ王子――パーンドゥ王とクンティー妃（＝プリター夫人）の間に生まれた五人の王子の第三。伝承では、インドラ神によって、クンティー妃が妊（みごも）ったとされる。髷麗わしき（もの）等の異名をもつ。

アルヤマン――天神の一柱で、祖霊たちの長。

暗性――「タマス」。物質を組成する三重の素因の第三で、暗黒、暗愚、愚鈍、無知の性質をもつ。

意(志器官)――「マナス」。微細な物質からなり、思惟思量をつかさどる内的器官で、感覚器官の上位に立ち、また、第六の器官(根)といわれる。

イクシュヴァーク――太古の聖賢。

一切神――天神の一類。

インドラ神――神々の長、天帝。インドラ天は、このインドラ神が主掌する天上の楽園。

ウシァナス――太古の詩聖の一人で、詩祖。

ウッチァイシュラヴァス――インドラ神の神馬。天地創出に当たり、乳海攪拌の際、生じ

た馬匹で、馬匹の始祖、王とされる。

ウラガ――ナーガの項を見よ。

ヴァースキ――蛇類の長の名。

ヴァーユ――風(神)。

ヴァイナテーヤ――ヴィシュヌ神の騎乗する神話上の鳥ガルダ。

ヴァスゥ神群――アグニ神のほか、大地・風・空・日・天・月・星辰の七神からなる。恩恵、保護、安寧、暗黒駆除に関わる。

ヴァスデーヴァ――クリシュナの父の名。このため、クリシュナはヴァースデーヴァ(ヴァスデーヴァの子)とも呼ばれる。

ヴァルナ神――天則(リタ)の峻厳な保護神で、ブラーフマナ文献以後、概ね水神として崇められ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com